



キャリア教育

菊池 武剋
(東北大学名誉教授)

I キャリア教育とは何か

school to work という課題

職業指導 (vocational guidance) は、若者たちに対する職業選択の相談、援助活動として始められ、学校教育にその活動の場を移行させていった。その基本的な課題は、学校から社会 (職業) への移行にあった。この school to work という課題は、職業指導、進路指導、そしてキャリア教育へと継承された。school to work という課題自体は変わらないとすれば、職業指導、進路指導とキャリア教育とで何が変わってきたのか。とらえ方、アプローチが変わってきたといえよう。

職業指導から進路指導・キャリアガイダンスへ、職業相談から進路相談へ、そしてキャリア教育へと、school to work の支援をめぐるアプローチは変わってきた。そこに見られる変化は、vocation から career へ、vocational choice から vocational development, career development へという変化である。

キャリア教育は、school to work という課題に、career, vocational development, career development の観点からアプローチする。

キャリア

キャリア教育を考える上で、キャリアとは何かを明らかにすることが必要であるが、その定義は必ずしも明確ではない。今日の学校キャリア教育の推進の契機となった『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』(文部科学省 2004) は、キャリアとは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係づけや価値づけの累積」としているが、この定義は、スーパー (Super 1980) の「キャリアとは生涯過程を通して、ある人によって演じられる諸役割の組み合わせと連続」(A career is defined as the combination and sequence of roles played by a person during the course of a life-time) に概ね対応する。一方、組織心理学や経営心理学の分野では、た

例えば「キャリアとは、ある人の生涯にわたる期間における、仕事関連の諸経験や諸活動と結びついた態度や行動における個人的に知覚された連続である。」(The career is the individually perceived sequence of attitudes and behaviors associated with work-related experiences and activities over the span of the person's life. Hall 1976)。あるいは、「成人になってフルタイムで働き始めて以降、生活ないし人生全体を基盤にして繰り広げられる長期的な職務・職種・職能での諸経験の連続と節目での選択が生み出していく階層的な意味づけと将来構想・展望のパターン」(金井 2002) といった定義が見られる。

後者は職業や職務との関係が明確であるだけ、明快である。それに対して前者は生涯を通して演じられる役割 (ライフ・ロール) ということ、総合的であるが曖昧でもある。ここでのキャリアはライフ・キャリアという意味である。キャリアに「職業キャリア」と「ライフ・キャリア」とが混在して、一方でキャリアは「生き方」に近い意味、他方で職業上の能力といった意味合いをもつ。そのため、キャリア教育というときにも、ある人は前者のニュアンスでとらえ、ある人は後者のニュアンスでとらえることになる。本来この2つは矛盾するものではなく、統合されるべきものである。

キャリア発達

キャリア発達は、過去・現在・未来の時間軸の中で、社会との相互関係を保ちつつ、自分らしい生き方を展望し、実現していく力の形成の過程である。社会認識と自己認識の結合としての自己理解と自己統制、つまり、社会の中で自分をとらえ、自分をコントロールし、方向づけていくことは、生涯にわたって続くプロセスである。働くこと (役割を果たすこと) の中で自分を生かし、それを通して社会の一員として主体的に生きていく力は、ある年齢に達したからといって自然に身につくものではなく、様々な経験を通して育成される。

キャリア, キャリア発達, キャリア教育

キャリアおよびキャリア発達の概念から、キャリア教育とは何かを考えると、広義には、「ライフキャリア開発（人生における役割、環境、出来事の相互作用と統合を通じて行う全生涯にわたる自己開発）」(Gysbers, Heppner&Johnston 2003)の支援ということになろう。『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』は、キャリア教育を「キャリア概念に基づいて児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」としている。

さらに、中教審(キャリア教育・職業教育特別部会)答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』(2011)は、次のように整理している。

人は、他者や社会との関わりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断し、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。このキャリアは、ある年齢に達すると自然に獲得されるものではなく、子ども・若者の発達の段階や発達課題の達成と深くかわりながら段階を追って発達していくものである。また、その発達を促すには、外部からの組織的・体系的な働きかけが不可欠であり、学校教育では、社会人・職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度を育成することを通じて、一人ひとりの発達を促していくことが必要である。

このような、一人ひとりの社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育が「キャリア教育」(下

線筆者)である。それは、特定の活動や指導方法に限定されるものではなく、様々な教育活動を通して実践される。キャリア教育は一人ひとりの発達や社会人・職業人としての自立を促す視点から、変化する社会と学校教育との関係性を特に意識しつつ、学校教育を構成していくための理念と方向性を示すものである。

II キャリアに関する理論

キャリアに関する理論は、職業選択に関する理論、職業的発達に関する理論、キャリア発達に関する理論に大別できよう。それは、キャリアをめぐる課題に対応して展開されてきた。つまり、職業 vocation からキャリア career へ、職業選択 vocational choice から職業的発達 vocational development、そしてキャリア発達 career development へ、という展開である。

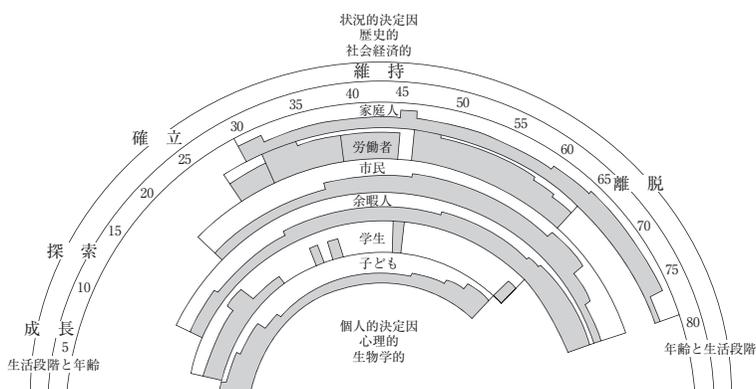
職業選択に関する理論として、人と職務とのマッチングに関する「特性・因子論」がある。キャリア意志決定を援助するため Parsons の3ステップ(個人研究、職業研究、両者の関連性についての合理的推論)や Williamson の6ステップ(分析、総合、診断、予測、処置、予後)などが枠組みとして定式化された。現在は、労働適応理論(Theory of Work Adjustment)、人・環境の一致性(Person-Environment-Correspondence)、労働環境におけるパーソナリティ理論(Holland)などがある。

職業的発達理論は、ギンズバーグによって提唱された職業的発達の概念を、スーパーが拡充・発展させた。スーパーは「自己概念を職業名に翻訳していくことが職業選択であり、それを具体化できた程度に満足度が比例する」とし、成長、探索、確立、維持、離脱の5つの職業的発達段階を区分した。さらに、クライツによって、職業発達課題をどの程度達成できたかを表す「キャリア成熟」という概念が提唱された。キャリア成熟は、キャリア選択の「一貫性」と「現実性」、選択の有能性、選択態度によって構成される。

しかし、職業だけが役割なのではなく、職業以外の役割も影響を及ぼす。人生上での役割(ライフ・ロール)を生涯のそれぞれの時期に応じて果たしていくという、キャリア発達の理論、life-span, life-space approach(Super 1980)が提唱された(図1)。スーパーのこのlife-span, life-space approachは、キャリア発達の過程を生涯に広げるとともに、個人が果たす人生役割(life-role)を包括的に扱おうとするものである。

現在日本において展開されているキャリア教育やキャリア形成支援は、スーパーが提唱したライフキャリアとしてのキャリア概念に基づいている。

図1 ライフ・キャリア・レインボー



出所：Super, Savickas & Super 1996：127を改変

III キャリア教育研究の成果と課題

キャリア教育研究の成果と課題について、キャリア教育学会誌『キャリア教育研究』（旧『進路指導研究』）の過去10年ほどの論文の内容を、キーワード風に見てみると以下ようになる。

進路カウンセリング、ブリーフ・カウンセリング、不登校生徒、進路選択自己効力、大学志望動機、進路決定支援システム、進路選択と職業の同一性形成、教職志望意識の変化、職業観形成、就職活動ストレス、職業興味、進路に対する準備度、米国総合的の学校ガイダンス&カウンセリングプログラム、勤労観、就労意識、キャリア発達課題、中高年労働者の職業発達、進路成熟、進路適応、小学生の進路意識、自尊感情と進路選択能力、キャリア発達の構造的解析モデル、ライフコース展望、大学進学動機と入学後の適応、大学進学動機と進学情報、自己分析課題、大学教育の経済的効用、学校適応、進路選択自己効力と進路成熟、米国中等学校家庭科におけるキャリア教育、キャリア展望、職務満足感、職業継続意志、職業知識の広がり、教育アスピレーション、キャリア教育モデル、青年期のキャリアカウンセリング、職業的進路不決断、職業選択行動の類型、職業指導創始期における職業指導、学校と職業の接続、ライフコース展望、ライフキャリア・パースペクティブ

進路（キャリア）をめぐって、心理学（職業心理学）、教育学、教育工学、教科教育学、教育社会学、教育史、教育経済学等、多様な研究領域の研究が見られるが、「キャリア教育」学としてまとまった分野（discipline）には見えない。

キャリアはもともと学際的な課題である。心理、発達、教育に関する分野、産業、職業、労働、経済、経営の分野、生涯発達・生涯学習の分野等々、関連する分野は多岐にわたる。これらの分野が「キャリア」「キャリア形成」「キャリア発達」といった課題において連結し、重ね合わされるとき、「キャリア教育」学が成立する。立場と方法論を異にしつつ課題意識を共有する1つの学際的領域が存在することになる。

しかし、ただ重ね合わせればよいというのではない。職業心理学に関して、Savickas (1995) は「職業心理学は発達心理学、社会心理学、比較文化心理学、人格心理学、ジェンダー研究といった分野から孤立したままである。職業心理学者たちは自分たちの研究が過小評価され、青年期や成人期の発達のテキストに取り上げられないと嘆いている」という。Osipow (1995) は、この孤立と過小評価について、「職業心理学者たちは概念や方法を心理学の基礎分野から引き出すことに十分なエネルギーを使わず、その成果を基礎分野に十分環流させてもいない。また、その研究からもっと大きな社会問題を外挿することも不得意である」という。

学際領域であるキャリア教育研究は、常にそれぞれの基礎分野との関連をもちつつ研究をすすめることが必要である。

参考文献

- 金井壽宏 (2002) 『働く人のためのキャリア・デザイン』PHP新書。
- 菊池武尙 (2008) 「キャリア教育とは何か」日本キャリア教育学会編『キャリア教育概説』東洋館出版社。
- 文部科学省 (2004) 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』。

- (2011) 中教審(キャリア教育・職業教育特別部会) 答申『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について』.
- Gysbers, Heppner&Johnston (2003) *Career counseling: process, issues, and techniques*. Boston, MA: Allyn & Bacon.
- Hall, D. (1976) *Careers in organizations*. Pacific Palisade: Goodyear Publishing.
- Osipow, S. H. (1995) *Handbook of vocational psychology: theory, research, and practice*. W. B. Walsh&S. H. Osipow (eds.) Mahwah, NJ: Erlbaum.
- Savickas, M. (1995) Current theoretical issues in vocational psychology: Convergence, divergence, and schism. in W. B. Walsh&S. H. Osipow (eds.) *Handbook of vocational psychology: theory, research, and practice*.
- Super, D. (1980) A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*. 16, 282-296.

きくち・たけかつ 東北大学名誉教授。最近の主な著作に「日本における犯罪心理学研究の歴史的動向——『犯罪心理学研究』誌を中心として」『犯罪心理学研究 50 周年記念特集号』105-117 (2011)。発達心理学, キャリア心理学専攻。